
自由きままに異世界記・・・と熊

黒部 愁矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由きままに異世界記・・・と熊

【Nコード】

N5673Z

【作者名】

黒部 愁矢

【あらすじ】

高校一年生だった、主人公は先輩と山登りをしていると、熊に追われることになり。異世界に転生してしまう羽目に。

突然異世界に放り込まれた主人公がそれなりに楽しみながら生活して、のんびりと元に戻る方法は期待せずに探す物語です。

作者の語彙力が半端なく乏しいため、生暖かい目で「こいつ変な言葉の使い方してやがる」って感じに笑ってやってください(^^; ;

プロローグ（前書き）

こんにちは、こちらに初めて小説を投稿させてもらう黒部 愁矢^{しゅうや}です。

この小説は主人公がのんびり生活するものですが、意外とノリで進む場面もあるはずですので気軽に楽しく読んで頂けたら幸いです。

プロローグ

「なんでこうなった・・・」

必要最低限の家具しか置かれていない質素な部屋で3歳ほどの少年は子供らしい柔らかな髪をいじくりながら顔をしかめていた。

確か、俺がこうなってしまったのはあの時のはずだ・・・

ある秋の日、高校一年だった俺は先輩と、葉がもう十分に紅く色づいた山道を歩いていた。

「ちよつと 君。もう少し立ち止まって景色を楽しみながら行きましょうよ」

「この景色より頂上の方が綺麗だと思いますが。もしかして先輩はもう疲れてしまったんですか？」

後ろを振り向くと案の定、額に汗を浮かべながら邪魔にならないように髪を一本に後ろでまとめた女性がこちらに來ている。

「そりゃ、運動してこなかったオタクにはこの山道は厳しいわよ」

何故か自慢げに胸を反らした。

「そんなに堂々とオタク宣言をしなくても・・・あ、もうそろそろ頂上みたいですよ」

とりあえず、ボケた彼女を無視することにして前を向くと上に向かう道が途中で消え、視界が開けているのが見えた。それを見ると彼女は、先ほどの疲れたような顔が一遍してパツと明るくなり全力で走り出した。

「全く、ペース配分を考えたら絶対頂上に着いた瞬間に動けなくなるだろ」

独り言を呟きながら歩いていると数十秒後、頂上から先輩らしき叫び声が聞こえた。

急いで先輩のもとへ走っていくと何やら黒い大きな物体が見えた。

（いや・・・まさかとは思うがアレが出たりはしないだろうな。）
嫌な予感がするが、なるべくその予感が当たらないことを祈りながら先輩のもとに着いた。

そこでは、見事に腰を抜かして一步も動けない先輩とその先輩の2倍はあると思われる熊が対峙していた

見事に予感的中である

とりあえず熊の意識を先輩から逸らすために手近にあった自分の拳より少し小さい石を2、3個拾って、熊の顔目掛けて投げつけた。
コントロールにあまり自身は無いが、無事当たったようだ。

「おい！ こつちだ！！」

叫ぶとその熊はこちらにゆっくりと振り向いた。と同時にその熊は何か悪いキノコでも食べたのかヨダレを垂らしながらこちらへ俺を食い殺さんという形相で走り寄ってきた。

「先輩！ 俺が時間を稼ぎますので早く山を降りてください！」

「でも 君が・・・」

「いいから!!」

ようやく立つことが出来た先輩が自分の心配をするが叫び返すと、素直にもと来た道を駆け下りていった

・・・

ここまでで一旦思い出すのを止めた。部屋を中心に直立不動で考え込むのは妙だと思ったからだ。ひとまず、ベッドで寝転びながら考えることにした。

確か、ここまでは普通ではなかったが、こうなる原因はなかったはずだ。

「あの後だったかな・・・。確かその次あたりに確か事の発端が起きた気がする」

先輩を山から逃がした後、俺は熊から逃げ続けた。とにかく熊の直線状に入らないように縦横無尽に駆け回りながら必死で山中を逃げ続けた。

すると・・・

「なんで俺らまで巻き込まれてんだよ!!」

「それはこっちのセリフだ!!!」

途中から何故か親友二人が俺の隣と一緒に走っていたのだ。

「折角、お前があのおタクだけど美人先輩と二人っきりで山でデートをするって聞いたから冷やかしてやろうと思って、隠れて見ていたのになんで俺らまで死にかけてるんだよ」

「そりゃあ、その野次馬根性で来た結果だろうな」

俺とバンダナを巻いた親友が軽いきがみ合っていると、その間にも

う一人の眼鏡をかけた親友が声を発した。

「そんなことよりさ、とりあえずあの熊は多分どれだけ逃げても追いかけてくると思うから、あいつを倒す策があるんだけど二人とも聞かない？」

その言葉にいがみ合っていた俺たちは一旦その提案に耳を傾けた。

「おい！　ここでいいのか！」

走り始めて大分経ったろうか。やはり熊は執拗にどこまでも追いかけてきた。そこで、俺たちは策どおりに熊が断崖絶壁に突っ込むように、そこを背に立っている。

「うん。タイミングが重要だから3、2、1で一斉に横に飛んでね」
策というのは単純にあの熊が突進してくることしか頭がないのを利用して断崖絶壁で待ち構え、ぎりぎりですべて避けて熊だけを落とすという寸法らしい。

・・・それにしてもこの策は本当に大丈夫なのだろうか。

そう悠長に考えている暇もなく、熊が俺たちのところまで後、数秒の時になった。

「それじゃ。　3！」

「2！」

3人が一斉に身構えた。そして後は横に飛べば済むはずなのだが・

・
「いち！つてえええ！！？」

動かそうとした足が動かなかった。そした更に驚いたことに、顔以外は全く動かなかったのだ。

他の二人も全く同じ状況らしく、突然の出来事に目を丸くしている。

そうして目の前の熊は全く勢いを衰えさせず、突っ込んで俺たち三人は崖に突き落とされた。

「・・・で、この状態か」

俺は今一度再確認した変えようが無い事実に思わず盛大なため息が出た。

「一体俺にこの姿になってどうしろっていうんだよ」

現実逃避は無理

「うーん・・・他に何かこれが夢だってことを証明できるものはなにかないのか」

ベタだが頬をつねれば目が覚めるか？ いや、頬が柔らかいってことしか分からんし。

それなら・・・

必死でなにかないものと頭を捻っているとノックする音が聞こえた。っと、同時に勢いよくドアが開かれた。

返事をしようとした瞬間にドアが開いたから、心臓が飛び出るかと思っただじゃないか。

見ると、俺と同じ茶髪を持つ少女がヒョコリと顔を出している。どうやらさっきのはわざとだったようで、俺の予想通りの反応に満足そうな顔をしていた。

「テオ！ 夕食の準備出来たからはやく来ないと無くなっちゃうよ！」

「うん、わかったよセリア姉さん」

「よろしい」

俺の返事に満足したのか、ニコリと笑って少女は出て行った。

・・・何故自然に名前が出てきたし。

恐らくこの体の記憶だからなのか、顔を見た瞬間に名前が思い浮か

んだのだ。

セリア・ウイステリア　俺の3歳上の姉、ということは6歳か。さっきの行動から見て思った通り悪戯好きだが、誰にでも優しい？らしい。3歳の頭だからなのか印象がおおざっぱだな。

「そして俺の名前はテオ・ウィルタニア・・・か。覚えやすい名前だよかった」

さすがにこれ以上考えても仕方ないと思い、家族の居る所へ行こうと扉を開けた。

どうやらこの家は2階まであるようだ。そのまま階段を下りていくと家族全員が食卓に着いていた。

そして、俺が席に着くと左目に三本の大きな傷跡をもつ父が口を開いた。あの傷跡についてはなんの情報も思い浮かばないということは子供たちは何も分らないらしい。

「よし、皆集まったな。それじゃあ、”頂きます”」

父の号令に続いて他の四人も手を合わせて言った。どうやら、この食前の文化は同じらしい。

それからは皆、談笑しながら少し固めのパンとブドウを1、2粒食べた。

俺は出来るだけ状況把握をするために会話に聞き入っていた。

そこで気づいた事は
まず、ここは国の中ではなく村に位置し、農作物を作って税金を領主に納入していること。

そして、識字率はそこまで高くなく、我が家では父と母以外には長男のカーンが文字の読み書きが少し出来る程度だということ。家に本はたくさんあるのは確認したから今度文字の読み方を教えてもらうか。

他にも魔法があったり、モンスターがいたりなど挙げてみるといくらでも出てくる。

まあ全てをまとめると今いる所は日本どころか世界すら違うらしい。

食事を済ませた後、何をしようかと考えていると真面目な兄からもう寝ろと言われた。

いやいや、あんたも8歳ですからね？俺と5歳差だからそんな変わらんでしょうよ。

姉さんもなんで私はまだ寝ないのよ？みたいな目で俺を見てんですかい。

もついいいや、家の外で情報収集をするのは明日からにして今日は早目に寝るとするか。

嬉しい誤算

「・・・目が覚めても何も変わらなかったか」

寝る前にもしかしたらとは思ったが、その期待は儚く散ってしまっただよう。

とりあえず、まだ目覚めきっていない脳を元に戻すために窓から顔を出してみた。

「わあ・・・空気が美味しいとは驚いた」

早朝の冷たい空気を大きく吸い込むと同時に今までは感じたことがなかった空気の味が体にしみわたり、感動して思わず口に出していた。

この世界では地球より環境破壊は進んでないとは良いことじゃないか。

半眼で外の景色を眺めながらそんなことを考えているうちに頭の回転も通常時に戻ってきてから、俺は外を眺めるのは止めて、ベッドの上に座り込んだ。

「さてと、情報収集をするにしてもまず何をしようか」

手櫛をしながら俺は今日の計画を立てていた。

計画を立てるといっても村の状況すら分からないのだから特にこれといったものも立てれないのだが。

それにしてもこの寝癖は中々手強いな。これだと外に出たら恥ずかしいだろう。

もういつそのことしばらく家から出ないで本を読み漁ってみるか。

「・・・本が読みたいな」

「本？」

「うわあ！ カーン兄さん！いつのまに」

突然の声に振り向くと、いつからいたのかカーンが背後に立っていた。

「お前、昨日から少し静かだとは思っていたが、そんなことを考えていたのか」

どうする。まさか俺が本を読むことに対する違和感をなくすための言い訳を考える前にこんな形で来るとは思わなかったぞ。一旦、本を読む気はないと言ってこの場をやり過ぎるか？ いや、それは駄目だ。ここでは学ぶ事をそれほど重視してないのだとしたら、次に本を読むチャンスは一気に減るだろう。ならここは即席の言い訳でカーンに読み方を教えてもらって後は自分で情報収集するか。

「兄さん。ちょっとお願いがあるんだけどいい？」

俺は意を決して口を開いた。転生前ではあまり喋らなかったことがここで悔やまれるとは思わなかったよ。・・・全く上手い言い訳が思いつかない。

「なんだテオ？ 俺に出来ることなら何でもいいぞ」

「うん。僕、最近本を読んでみたいんだけど・・・。兄さん。文字の読み書きを教えてくれない？」

「そういうことだったのか・・・。お前の歳なら外で遊ぶ方が本を読むより良いと思うんだけどなあ」

どうやらカーンは俺に実際の年齢、つまり3歳なら3歳らしく外で遊んでほしいようだ。

俺も出来る事ならそうしたい。転生する前では何度人生をやり直したいと思ったことはいくらでもあるからな。とりあえず人生を自縛霊が成仏する並に満足したい。だがここは日本じゃない。ファンタ

ジー（昨日の夕食で聞いた限りには）溢れる異世界だ。なのだから普通の男子は絶対に興味を抱く。勿論俺もその男子の一員なのだが・

まあ何を言いたいのかというのだ。

・・・俺はこの世界をこころゆくままに堪能したいのだから予備知識を身につけておきたいということなんだよ！！

「ねえ。お願いだよ兄さん。僕、本を読んでみたいんだ」

ここはもう玉碎覚悟でこの3歳という子供ならではの可愛らしい容貌を利用しての愛くるしい表情と少し潤んだ目でカールを上目遣いで見つめた。正直かなり恥ずかしい。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・だめ？」

しばらくカールを見つめていると不意にカールが突然俺の頭をなで始めて、その手を動かすことを止めずに言った。

「可愛い弟のためなら駄目なんてことは有り得ないさ。丁度今日は書斎が空いてるから一緒に勉強しよう」

・・・え？なにこれ。まさかのさっきのが決め手になったって感じなのか？

もしかしてこいつブラコ・・・ま、まあいいや。その辺については

気にしないでおう。

「・・・あ、ありがとう！　兄さん。それじゃあ朝食を食べた後にお願い！！」

予想外の結果に少し変な返事になってしまったが、特に気にもされずにそのままカーンが部屋を出て行ったのは助かった。

「・・・子供の手で意外と便利なんだな」

改めて子供であることの威力を実感した一瞬だった。

「それじゃあテオ。ちょっと読んでみたいと思う本を適当に持ってきてくれないか？　自分が読みたい本の方が楽しいだろう？」

「うん」

俺は軽く返事をして本棚に向かった。約束どおり朝食の後、カーンから文字の読み方を教えてもらうために二人で家の書籍にいるのだ。

そして言われた通り、適当に選ぶつもりで本を見ていたが俺は愕然とした。

題名が日本語で書かれてあるのだ。

目を擦ってもう一度見たが、間違いなく内容も日本語で書かれてある。

（これなら兄さんに教えてもらう必要は無い。適当に読み方は聞き流しておくか）

文字が日本語で書かれたあると分かった以上、最早8歳の男子に16年間分の知識量が備わった俺が教わることなどなにもないだろう。あると言えば常識ぐらいだが・・・まあそれも本を読んで知って

いけば何も問題はない。

ならなにを選ぶか

意外と本棚には多くの種類の本が並べられてあり、世界の町ごとの説明や、種族、魔法の使い方が書かれているような本がある。本当に使えるかはあまり期待出来そうもないが……。いつか時間があつたら試してみるか。

とりあえず、勘違いされそうな小難しい本じゃなくて、ここは男なら誰しも憧れを抱くであろう武器について書いてある本でも選ぶか。

15

「テオ。選んできたのか？」

「うん。これなんだけど……」

そう言つて俺は特に分厚すぎない程度の本をカーンに差し出した。

「武器大全」……。少し難しいが大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫。文字の読み方だけでも教えてくれればいいよ」

「分かった。なら始めようか」

それからは、武器の説明を活用して文字の読み方を教えてもらつている……。ふりをしていた。実際に内容を見ているうちに日本語と全て一致していたから教わる必要が無くなったのだ。

そして、この無意味な講義が終わったのは教わり始めて2時間後のことで、その時には疲れきったカーンの顔と初めて見た武器を目をキラキラさせて見ているテオの顔があったそうだ。

慣れ（前書き）

今日は大晦日というのもありますので普段より少し多めに書いてみました^^

慣れ

書齋でこの世界の情報収集を始めてから数年が経過して、最初の1年で既に俺は家族内で変人と見られていた。

まあ、ただでさえこの村では本を読む子供は二人いるかないかなのに、3歳の子供が一心不乱に大人でも頭が痛くなりそうな分厚い本を読んでいるから当然と言えよう。

その後の1年は、急に出来た暇をとにかく持て余していた。

前の世界でならここですかさず、ゲームやパソコンという言葉が出てくるがここでそれは存在しない。

セリアやカーンの友達と遊んでいても時々素が出て途中から奇妙な顔をされてしまう。

そこで俺は、父の所に度々相談にやってくる村人に話し相手をしてもらったり、村全体を散歩して何か楽しめそうな場所はないかと日々を過ごしていた。

このような自由きままな生活をしていた時に気づいたのだが、ここでは放任主義が一般的らしく、朝外に出て行って偶然見つけた川で夢中になって夜に帰ってきたときも、特に咎められずに夕食に参加できたのだ。

この生活を続けてもう1年経ていた。

「子供にとつての2年は早いなー……。つと、きたきた」

生まれて初めてする魚釣りを日課にして早半年。小慣れた手つきで魚を引き上げた。

この川では子供でも釣ることが出来る程度の魚しか出てこないのだから、考え事をしながらでも出来る。

そして、釣った魚を木の枝で刺してから火で焼いた。

この動作も慣れたものだが、どうにもおかしい。慣れ方が順調すぎる。

どうにかして自分のステータスでも知ることができたら良いのだが……。

「ステータスを見たいって思ったら出てくるのかな。　　っな!？」

疑問に思ったら試してみる。この世界で始めて身に付けた心構えだ。一応冗談のつもりでもやってみる価値はあるだろう。

だが、ふざけた気持ちとは裏腹にその通りに知りたいと強く思ってみると、頭の中にゲームでよく見る図が出てきたのだ。

これは、この2年間で一番驚いたことじゃないだろうか。

よく見ると、名前の下にレベルと能力値が書かれてあり、その下にはスキルがある。しかもスキル名は今までの生活で培ってきたようなものばかり。

「まさか出てくるとは思わないよ……。ちやっかし、釣りスキルとか制作スキルとか入ってるし。能力に至っては……。魔力？」

釣りスキルの横の数値が他のスキル名のものよりも何故か頭一つ高いのも気になるが、能力値のところを見ると一番下に魔力と書かれてあり数値が10と他の力や俊敏さよりも少し高いことに、すぐにある疑問が思い浮かんだ。

「もしかして……。魔法の素質あり？」

そう思った瞬間、体がうずうずし始めた。まさか自分がそれを使えるとは思っていなかったからこれは良い想定外だ。

「ま、まあ善は急げとよく言っし……。」

俺は急いでこんがり焼けた魚を食べて、書斎へと走っていった。

「確か”魔法の心得”だったよな。題名からしてあれが多分入門書だろ」

実際は読破している時に他にも見つけたのだが、専門用語が多すぎて理解出来なかったのだ。受験勉強でこういうのに慣れていなかったら5分で数時間寝れる自信はある。あの頃はきつかった……。昔の受験生時代を思い出すと、あの頃は辛かったと誰しも思うのではないだろうか。

……。まあ俺は結局志望校に落ちてしまい、あの努力が水泡に帰ってしまったのだが。

ふと、あの頃を懐かしんでいる間にも子供の手でも届く高さのところに目的の少し古びた本を見つけ、すぐにそれを取りテーブルにのせた。

もちろん以前に読んだことがあり、内容もなんとなく理解できたので一応確認程度に開くだけである。さすがに屋内で実験するのは危険だし、外に本を持っていくのも気が引けるからここで手順を覚

えることにしたのだ。

「とりあえず何か簡単なものは……。うん、この手から火を発生させる魔法がいいな」

魔法に名前は付けられてないらしく、ほとんどが文字で説明するか絵で描かれてある。

その中から最初のページの方に紹介されてある火の初級魔術を実験することに決めた。

だって、大体のゲームで最初に覚えられるのが火の玉を出す魔法じゃん。

魔法書を元の場所に戻して書斎から出ると。丁度玄関にふくよかな体型をした、見るからに明るそうな男性がいた。

「こんにちは！」

俺は子供特有の無邪気な笑顔で挨拶して、忘れずにお辞儀をした。すると、俺の存在に気づいた彼は笑顔で挨拶を仕返した。

「おお、こんにちは坊や。行儀が良い子だねえ。うちの子にも君を見習って欲しいものだよ」

俺は苦笑して、外に出た。今ぐらいの子供はそんなに礼儀がなくても大丈夫だろうに。

（荷物の多さを見ると、さっきの人は他の町から来た商人かな？）別にこれといった確証はないのだが、村の近くに停められた馬車の荷が普通の人にしては多いからそう考えて良いのだろう。後で聞いてそうだったら商品を見せてもらってみよう。

そう考えている間にもさつき魚を食べた場所に着いていた。
まあいいや。そのことは魔法が出来るか試してからにしよう。

「よしっ！　まずは集中だな」

どうやら魔法を使うための共通の手順は集中すること。・・・そりや当然だろ。

そして次は火を点すイメージをする。

（イメージねえ・・・。とりあえず指先にでもするか）
イメージしやすいように目を閉じてみた。

そして、指先に火がつくように念じてみる。

すると予想していたよりも時間がかからずにぽつと小さな音がして、指先に何か奇妙なもので包まれている感覚が始めた。

目を開けてみると実際に指先に蠟燭ぐらいの大きさの火が出来ていた。

「ふう・・・。出来てよかった」

「なにが出来たんだ？」

「うわ！？」

魔法が出来たことに安心して息をついた瞬間に、背後から不意に声を掛けられた。

「ほう。君は魔法が使えるのか。この村にしては珍しいな」

驚いた時に消えてしまったが俺が魔法を使っていたのが見えたらしく、後ろにいる可愛らしい格好に似合わない口調の少女が少し驚嘆

していた。

「だけど、今はこれしか出来ないから全く実用的じゃないけどね。それにしても君は誰なの？」

「私より君が先に名を名乗れ。聞いた方が先に言うものだろう？」
目の前の少女は俺を見下ろしながら言った。少し話し方にむかつく。

・・・が、確かに道理には合っているから俺は渋々名乗った。

「僕の名前はテオだよ。それじゃ今度こそ聞くけど君は？」

「テオか。顔に似合わない勇ましい名前だな。私の名はアレシアだ。そしてさっき君が魔法をしていたが、使い方がなっていないな。まるで魔力を集中出来ていないじゃないか」

いきなりの辛口評価にむっとした俺は少し刺刺しい感じに言ってみた。

「それならアレシアさんは魔法を使えるんだろ？」

勿論俺は魔法を使えないものと思っていたが、アレシアは胸を反らして言った。

「ああ。少なくとも君の魔法が話しにならないくらいには使えるぞ。なんなら今からやってみせよう」

は俺の返答も聞かずにその場で集中し始めた。手に力が入っているのを見たところ手の平で魔法を発動させるつもりなのだろう。するとアレシアを中心に異質の空間が出来たような感じがして、ふ

と自分の腕を見ると鳥肌が立っていた。

この嫌な感じがして数秒後アレシアの手のひら大の火の玉が完成していた。このぐらい大きいとぶつけたらただの怪我では済まないんじゃないね？ 嫌な思惑が一瞬頭をよぎってしまった。

「ふう……。どうだ？ まだまだ本気を出せばこんなものではないのだぞ？」

アレシアは大量に流れ出た汗を拭きながら、誇らしげに自慢してきた。しかしこの様子を見るとさすがに最後のは見栄を張っただけだろう、疲れすぎだ。

「確かに君は凄いね。それにしてもその大きさの魔法はどうやってするの？」

好奇心でなんとなく聞いてみると、俺が負けを認めるようなことを言ったからだろうか。

少し上機嫌になったアレシアは偉そうな口調で答えてきた。

「私みたいに教育を受けている者はやはり無知の者には手をさしのべてやるべきだろう。ちょっともう一回さっきを出してくれないか？」

無言で頷いて、先程と同じように発動してみると蝋燭のような火がともった。

「ほう……。君は基本を理解していないみたいだが、周囲の魔力を利用したらどうだ？」

「周囲の魔力？ そんなのがあるの？」

「はあ？ 当たり前だろう。周囲には魔力が満ちている。だからそ

れを自分の体内に取り込んで一時的に魔力を増幅させるんだ。分かったか？」

「う……。り、理解できた」

まさかの罵倒に戸惑いながらも俺は周囲にあるらしい魔力というものを意識……。してみた？　よく分からんが火を出す前に周囲の魔力が自分の中に入っていくようなイメージをしてみた。

「ぬ……。その調子で集めるんだ」

隣のアレシアの声を軽く聞き流してそのまま集中し始めた。

そして途中から脳が締め付けられる感覚がし始めたあたりで、魔力を取り込むことを止めて指先に集中した。

すると、すぐにアレシアの火の玉よりは小さかったが最初の火の2、3倍くらい大きさになっていた。

「ほう……。もしかしたら君は魔術の才能があるのかもしれないな。……。あ、もう時間のようだから私は戻るとするよ」

俺は指先についた火を消しながら聞いていたが、ふとアレシアは思い出したように言った。

「そうなの？　じゃあねー」

「……。」

「……。？　どうした　って痛い！」

手を振って別れようとしたが、目の前の亜麻色の腰まで届く髪をほどこしながら少女は何故か俺をじと目で見ていて、少しの沈黙の後に俺の頭を叩いた。

「普通、何か獣が出るかもしれない森の中を可憐な女子に一人で歩かせないものだろう！　その……。まあ、あれだ……。付き添えと言っているんだからはやくする！！」

俺は恥ずかしそうに顔を赤くしたアレシアを見て、内心微笑ましく思った。

あれだ、いくら俺がそういうのに慣れてなくてもさすがに精神年齢の高さで余裕が出るんだろう。

ここは少しふざけてみるか・・・。

俺は少し悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「分かりました、お嬢様。それでは行きましょうか」

「う・・・うむ」

小さくアレシアは俯いたまま頷いた。言い出しっぺなのに恥ずかしいらしい。

村に帰りついた時には既に夕方になっており、どこまで付き添えばいいのだろうか、と思っていたのだがどうやら父のところに来ていたあのふくよかな男性。つまり商人の娘のようなので、結局家に辿り着くまで一緒に来ていた。

「それじゃ、ありがとう」

「うん。今日は魔法教えてくれてありがとうアレシアさん」

そして軽くお礼を言っただけで俺は家に入ろうとした。

「あ、少し待ってくれないか？　すぐ済むから」

そのまま待っているとアレシアはバッグから綺麗に輝く小さな石がついたネックレスを取り出した。そしてこれを見て少し考えた後、

意を決したように言った。

「少し目を瞑っててくれ。見られるのは恥ずかしいからな」

目を瞑っていると首に冷たいものが触れる感じがして、頬に何か柔らかくて温かいものが軽く触れる感じがした。・・・ん？

「・・・え？」

「ふふふ・・・。久しぶりに楽しかったからこれはお礼だ」

慌てて目を開けると頬にキスをして少し楽しそうな顔をしたアレシアが商人のところに戻りながら言った。

あまりに想定外なことにしばらく呆けていたが、はっと正気に戻った俺は慌てて動き出そうとしている馬車に手をぶんぶんと振った。

その後食卓でこれが良い話のネタになったというのは言うまでもないだろう。

探検前日

あれから数ヶ月経ち、季節は夏から冬に変わっていた。

その数ヶ月の間、なんとなくスキルや体を鍛えていた結果、自分のステータスを見ることが出来るようになっていくつかスキルや能力値の秘密が分かるようになった。

例えば、能力値はその能力値に見合った行動、つまり体力なら走り続けることによって上昇する。そのため毎日暇つぶしに川を泳いだり、散歩していたことで体力はそこそこついているらしい。だが、上昇率も関係しているらしく人によって伸び方が違うようだ。

ちなみに俺は力があまり上がりにくいらしい。

……ん？ということは俺、将来身長が伸びる見込みなし！
！？

「い、いや。きつと気のせいだ。今力が無いのは単純に子供だからだ。成長期がきたらきつと伸びるさ」

俺は釣り糸を垂らして魚を待っている間に出てきた想像を打ち消した。いくらなんでもそれはないと信じた。そして魚が引っ掛かると俺は力負けして川に落とされないように気をつけながら釣り上げた。最近力が微々ながら上昇してきたから前より少し大きめの魚が釣れるポイントへ移動したのだ。

釣りスキル 恐らく俺が今持っているスキルの中で最も熟練度が高いスキルの一つだ。

そしてそれが上昇するとどうなるか詳しくは分からないが、体感的にはどの場所に魚がいるかがなんとなくで分かり、魚を釣るタイミングが頭ではなく体で分かるようになってきていた。

釣った魚をいつも通り食べるために木の枝で突き刺して乾燥した小枝と葉などを積み重ねて燃えやすいようにした。ここで以前なら小枝と小枝をひたすら擦り合わせて火をつけていたのだが、今俺には魔法で火を出すことが出来るのだ！

しかし、初めて嬉々として魔法を使った時は、そう上手くいかず、火を起こすのを通り越して一瞬で灰になってしまった。

そしてようやく加減を覚えたから枝が中々見つからない日でもかなり快適に魚を焼けるようになったのだ。

そしてこんがり焼けた魚を頬張りながら、スキルについて考えていた。

いや、考え続けないと暇なんですよ。

スキルというのは恐らく才能を目で見えるようにしたもののように見えるが、少し違って実は努力によって得られることが出来るもの

のようだ。これに気づいたのは軽業のスキルを手に入れた時。

これは暇な時に『倒立とか側転って格好良いよね？』って思って練習していたらスキル覧に追加されたのだが、最初は倒立すら出来なくてまさかの運動神経の低さに落ち込みはしたものの現在まで毎日かかさず練習していたら、いつのまにか跳躍力が上昇していたりバツク転が軽々と出来るようになっていた。

……いつかは壁も走ることが出来るんじゃない？

実はそういう忍者みたいな動きをしたい一心で練習しているというのは秘密の話である。

他にも人間観察や動物の動きを見ていたら、身につけた観察眼や石を目標目掛けて投げることをして手に入れた投擲など、便利なんだからそうじゃないのか分かりにくいスキルも習得していた。

そんなことを考えていると、背後から誰かが近づいていることに気づいた。

これはセリアの悪戯にびくびくとおびえていたら付いた弱者の本能

チキンソウル

の効果で、ちょっとした身の危険を数秒前くらいに察知することが出来るのだ。

・・・偶に外れるけど。

振り返ると同時に「ひゃあ！」っと体をびくりと震わせて驚く、このスキルを手に入れることになった張本人がいた。

「姉さん・・・。背後からこっそり近づいて悪戯しようとしなないでよ」

俺は呆れるように目の前で悔しそうな顔をしている姉に言った。が、今回おどかす気は無かったようで、本人曰く「無意識にやってしまっただから仕方ないじゃない」だそうだ。

俺はセリアが毎日朝早くに出て行って夕食の時に帰ってくる俺を心配してちよくちよく様子を见に行っているのだと、母が笑いながら「お姉ちゃんには内緒よ？」と密告したのを思い出した。なんでも俺は生まれた時少し体が弱い子だったため、セリアやカーンは俺が読書三昧の時によく「運動して頑丈な体になりなさい」と言っていたのだ。あの歳から家族を思っつて凄いな。

「それで、今日は何の用があつて来たの？」

「それはね、家族には内緒でちょっと探検をしようとしなない？」

俺は嫌な汗が流れているのを感じた。セリアがこの悪戯をする前の笑みを見せた時は大体ろくなことがない。

どんな危険な場所を探検するつもりなんだ・・・。

「・・・それで、どこを探検するつもりなの」

「この川の上流にある滝の奥にある洞窟よ」

「ふーん」

この川の上流に滝なんてあったのか。この川は下流でしか釣りをしてないから気づかなかったな。

「それで、どうするの？」

「僕が姉さんに付いて来るかどうかだね。僕が付いてこなかったら姉さんはどうするの？」

「勿論一人でも行くわ。きっとあの洞窟の中には面白いものがあるに違いないのよ！」

・・・姉さんってトレジャーハンターでもしてたっけ…………。

いかん。このまま一人だけで行かせたらなんか帰ってきそうにない気がする。

俺は必死で探検を止めさせる良い説得を考えていたが結局思いつけなかった。

「・・・僕も一緒に行くよ」

「ほんと！ それじゃ明日の朝から出発よ！！」

そう言っただけ姉は一瞬で走り去っていった。

そして俺は溜め息を吐いて、気晴らしに釣りを再開した。

「テオ。準備は出来た？」

翌朝、自分の部屋で念のために包帯や散歩中に見つけた薬草などを鞆に詰めていた時にセリアが様子を見にきた。

「出来たよ。って、姉さん。・・・その手に持ってるのは？」

大丈夫だと言ってセリアの方を向くと何故か両手に青銅の短剣が一本ずつ握られている。

「え？ 探検してる時に何か危険があつた時に対処できなきゃいけないでしょ？」

「それはそうだけど・・・」

俺は続きを言うのを止めて「行こっか」と促した。

少し怪訝そうな顔をしたけどすぐに考えるのを諦めて、俺に左手の短剣を渡してきた。

「それじゃ、急いで行きましょうか」

「うん」

・・・きつとどこからこの短剣を持って来たかは聞くべきじゃないんだろう。

川沿いを進んでいくとすぐに水が激しく流れ落ちる音が聞こえてきてそれからあまり時間が掛からずに滝の前に到着していた。

だが、洞窟へと入る入り口のようなものは見当たらない。

「姉さん。洞窟へはどうやって入るの？ 入るには滝を強行突破するようにしか見えないんだけど・・・」

姉はステップするように滝へと近づいていった。

「さすがにそれはしないわ。確かここらへんにあるはずなんだけど・・・」

そう言つて滝の近くの壁を叩いたり押したりして隈なく調べている。

そしてある場所を押すとその周囲だけ扉のように開かれた。

「あつた！ それじゃ、入りましょ」

「姉さん。どうやってこの隠し扉見つけたの・・・」

「テオを探している時、暇だから滝を上から見ようと思って崖登りをしていたら偶然見つけたのよ」

「それ暇だからすることじゃないし偶然にもほどがあるよ！」

隣で叫ぶのを笑顔で無視してセリアは洞窟へとすぐに入っていった。

探検当日

洞窟にいざ入ってみると途端に視野が狭くなった。光源が入り口からの陽光しかないのだ。

何か松明代わりになる棒はないか・・・。

「テオ。とりあえず明るく出来るものを探しましょ。暗いと何があるか分からないからね」
どうやらセリアも同じことを考えていたらしく周囲に何かないか探していた。

あつた。

入り口の隅に乾いた木の棒が数本転がっていた。それを拾ってみると丁度松明にも使えそうな大きさに見える。

ここは扉もそうだったけど人が通ることを想定されてるとしか思えない作りになってるな。だけど、埃の溜まり具合から見て全く使われてない。何故だ？

恐らくこれも松明として使うことを想定して入り口付近に置いたのだろう。
しかし、いくら考えても仕方が無いと割り切り火をつけることにした。

勿論魔法で

するとすぐに松明が完成したのは良いが、セリアは何だか呆れたような顔をしていた。

何故だろうか？・・・っあ、そついや魔法使えることはアレシアさんしか知らなかったな。

「テオ・・・。あんたいつの間に魔法使えるようになってるのよ。これじゃ、火打石をこつそり持つてきた意味がないわね」

「まあ・・・ね。一応秘密にしてくれない？　僕が魔法使えること」「ふーん。事情は知らないけど一応努力してみるわ」

・・・この姉。絶対言いそうだ。

「な・・・なによ。言わないわよ。・・・きつと」

俺がじと目で見ていたのに気が付いたらしく、急に弁解をし始めたが弁解にはなっていない。むしろ言う確率が上がったようなものだ。

「・・・言いふらすなら家族だけをお願いね」
「勿論よ！」

途端に悪戯っぽい笑みを見せる姉。

元気なのは良いけど・・・、疲れるなあ。

セリアの笑顔に苦笑で返して、気を取り直し周囲に注意しながら奥へと進んだ。

進んでいて分かったがこの洞窟は枝分かれしておらず、ここは隠れ家というよりむしろ抜け道のために作られたと推測していいのかもしれない。セリアが期待したように、お宝があるというのでもなく獣が棲みついているわけでもないようだ。

そんなことを考えながら歩いているうちに、唐突に今まで感じていた違和感に気づいた。

「そついえば何でこれを見つけてからすぐに突入しなかったの？　姉さんなら見つけた瞬間に突入しそうだけど」

最初、セリアからこれを聞いた時に何かおかしいとは感じていたのだが、その違和感はこれだったらしい。セリアなら自分の気持ちを

最優先して単身で突入して夜中に帰ってくるはずだ。

するとセリアは少し気まずそうな顔をして。少し迷いながら言った。
「あたしも最初はそうしようとしたわ。だけど、入った時に洞窟の奥から何か変な声が聞こえたのよ。だから・・・一人だと少し危ないかなーって思ってた・・・」

「姉さん。もしかして・・・お化けが苦手？」

ビクッ！

「なんのことかしら？ 私にそんなものは通用しないわ」

すぐにセリアは普通に返事をした。それにしても一瞬体が震えたように見えたのは気のせいだろうか。・・・いや、よくよく見るとセリアからは汗が滝のように流れ出ている。

そして何事もなかったように進んで数分。

「・・・・・・うわあああああ！！！！！！」

「きゃあああああああ！！！！！！！！！！」

試しに悲鳴をあげてみたところ、すぐにその数倍の音量でセリアが叫んだ。

「・・・はい。嘘です」

「ッ！！！！！！？」

涙目で睨みつけてきた。どうやら本当にお化けが苦手らしい。

「テオ・・・。後で覚えておきなさい」

「キヤアアアア！！！！」

セリアが言い終わる前に洞窟の先から誰かの悲鳴が聞こえた。声の

大きさからして結構遠くにいるらしい。

「テオ！ 急ぎましょう！」

叫ぶや否やセリアは走り出し、それに続いてある程度整えられた土の上を俺も走っていった。

そして数分後には道の途中にある開けた場所^{ひろ}。そこに入る直前で二人は身を潜ませていた。

松明の火は広場が明るくなっているのを確認してから消してある。そこから広場にいる人物を気づかれないように確認すると、人影が二つあった。

一人は細身で小柄な男。片方は何をされたのかは分からないが、地面に倒れていた。

「……多分あれは盗賊ね。あっちの倒れているのは誰かしら」

「分からないけど盗賊なら、他に仲間がいると思うから危ないよ。一旦父さん達にこのことを知らせない？」

相手をもし二人がかりで倒したとしても、他に仲間がいたとしたら子供二人が太刀打ちできるわけがない。確実に殺される。だからここは大人の力を借りるのが得策だろう。

「それじゃあの倒れているのがどうなるか分からないじゃない」

「それじゃあどうすれば……」

二人してどうして良いか分からず途方に暮れていると広場にいた男がその倒れている人に話し始めた。

「おいおい、早く立ち上がって俺を楽しませてくれよ奴隷。折角誰も居ない場所に來たっていうのに・・・なあ!!」

「あうっ!!」

「ひひひ。良い声で鳴くじゃねえか」

男は下卑た笑い声を上げながらその足下で倒れている奴隷の腹を蹴った。

この男は奴隷と二人でこんな人気がないところに来て、無理やりその奴隷を使って自分を楽しませようとしているらしい。

「・・・この下種が」

気づくと二人とも同時に呟いていた。セリアに至っては目が据わっている。

「テオ。二人であいつを倒すわよ。仲間がいなくてことが分かったからいいわよね?」

「うん。ていうか姉さんは闘えるの?」

それは最初に疑問に思っていたのだがセリアは無言で頷いた。

そして二人してこっそりと広場に忍び込み、男の背後に近づいていた。つた。

幸いなことに男は全く周囲に注意を払っていないようでセリアと俺の気配に気づいていなかった。

そしてアイコンタクトをして、二人同時に握っている短剣で突き刺す。

セリアは首に。そして俺は心臓を。

「ぐっ!! なんだ!!?」

これで絶命するはずだったが死ぬまでには至らずこちらの存在に気

づかれてしまった。

確かにセリアの一撃は見事に相手の首を貫いていた。だが、俺の一撃は男が着ていた鎖帷子に阻まれていたのだ。

死んでないのを確認してセリアと俺は後ろに跳んで距離をとった。

「テオ！ まだ追い討ちをかけるわよ！」

「おう！」

だけど、首を貫かれているからしばらくしたら死ぬはず。

事実、男の首からは大量の血が流れ続けている。恐らく大量出血で死ぬだろう。

「くそお！！ お前らだけでも・・・道連れにしてやらあ！！！」

しかし、その男は腰にさしたショートソードを取り出し、俺の方に突進してきた。

「っ！！！」

それを俺は横に跳んで避けた。そして勢いを殺しきれず転んだ男の足を切りつける。

苦痛で男の顔が歪み、その顔が首から離れた。セリアが男の首を切断したのだ。

「姉さん・・・」

「・・・行きましよ。とりあえずその子も村に連れて行くわよ」

「うん。その子は僕が連れて行くから姉さんは先に行っていいよ」

「そうね。お願い」

そう言ってセリアは先程来た道を戻り始めた。彼女の足は微かに震

えていた。

やはり、下種な男と言っても10歳になったばかりの少女が人殺しをしてしまったのだ。

さすがにあの明るいセリアでも堪えているだろう。

「君。大丈夫？」

俺は出来るだけ優しい声色でその奴隷だった人に話し掛けた。

「っひ・・・！ あ・・・う・・・」

目の前のフードを被った人物は怯えながらも小さく頷いた。

あの時は盗賊の方にはしか目がいつていなかったが、まだ服が脱がされてはいないとこを見るとまだ精神的ダメージにはある程度は抑えることが出来たのだろうか・・・。

内心俺は少しだけ安心した。なにせ、奴隷という制度については授業でしか学んだことがないからどのような仕打ちを受けているかは詳しく知らない。だからこの人がまだ怯えながらも喋ることが出来るだけマシなのかもしれない。

「それじゃ、僕の家で一旦来なよ。ここにいたってどうしようもないでしょ？」

「え・・・でも・・・」

「いいからいいから。ほら」

手を差し出すとようやく、根負けしたのか手を握ってきた。か細い力だった。

「・・・あの」

「ん？ なに？」

「・・・あなたは、何故私を・・・助けたりしたんですか？」

来た道を松明に火をつけなおして戻る道中でフードを目深に被った少女（声と身長から判断した）は急に質問をしてきた。見るとその人はまだ体震えは止まっていけない。

「それは・・・あの男が僕達にとって許せないことをしたからかな？ それに人助けはするものだよね」

俺は微笑みかけながら言うと、若干戸惑いながらもその少女はまた話し始めた。

「私が・・・・・・獣人なのには？」

「え？ 獣人？」

予想外の言葉に俺は間抜けにもオウム返しをしてしまった。

そしてその少女はそれを気に留めず、フードを外すとそこに黒くて長い髪が現れ、人間なら存在しない場所、頭に三角のピンと立った耳が生えていた。

「そう・・・。あなた達からしたら・・・どうでもいいはずなのに・・・」

その獣人の少女は黒い目を伏せてポツリポツリと少しずつ語っていた。

そういえば、本で自分以外の種族を差別して迫害している人間が多く、それを認めている国もあると書いてあったな。そこを読んだ時むかついたからよく覚えてる。

「それでも……。獣人とか人間とか関係なくこんな可愛い子が
じめられていたら僕は助けるけどね」

「ッ！ 嘘」

一瞬凄じ驚いた表情をしたが、すぐにもとの暗い表情にもどって俺
の言葉を拒絶した。

さっきは精神的なダメージは抑えられたと思っていたがそれは勘違
いのようだ。

むしろ人間不信になつてるように感じられる。これを解消できる気
はなさけないがしない。

だけど、その中にも心優しい人はいるということを知って欲しい・
。

「嘘じゃない。なら君がいじめられようとしたら俺はそれから全力
で守るよ。だから人間の中にも信頼出来る人はいるってことを信じ
てくれない？」

「え……。それは……。あの……。……」

それでも断言するとその少女は目を見開いて驚き、眼が上を向いた
り左下を向いたり様々な方向に次々と向いていた。

「……。あ。洞窟を抜けたみたいだね」

「っあ……。うん」

そして洞窟の外にいたセリアと合流することになった。

探検当日（後書き）

アクションシーン・・・難しいですね^^;
最早分からなくなってノリで書いてしまったよ・・・orz

帰宅 & a m p ・ 増員

洞窟を出た途端に飛び込んできた陽光に俺達は目を細めた。

「・・・まだ昼だったのか」

早朝に入ったのもあるが、思っていたよりも時間は掛かっていなかったらしい。

それにしてもこの眩しさでの目の痛さを感じると内心では目があ！
目がああああああ！！！！　って叫びたい。勿論某大佐のよう
うにね。だけど・・・

俺は隣で同様に目を細め、目の前に広がる風景を眺めていた少女を見た。日の光が反射して黒髪が綺麗に輝いている。だが、ふとちらをちらりと見るとすぐにフードを被りなおしてしまった。

・・・黒髪を見ると日本のことが懐かしくなってくるからついガン見しちゃってたよ。

その視線をどう解釈したのか少女は少し不快そうに言ってきた。

「あなたも・・・私の髪を見て・・・不吉だと思っんでしょ」
まあ、なんとも・・・予想外なことを言う子だことで。

「なんで？　特にこれといって不吉なことなんてないと思うけど」

「この黒髪が問題っつー！！」

今までの静かな口調から一変して唐突に怒ったように叫びだした。まるでそれが常識だとも言つように・・・。

だが、俺からしてみたら黒髪が普通の国に生まれていたからただの黒髪である。まあ強いて言えというなら一つくらいしか思い浮かばんのだが。

「・・・その黒髪が凄く綺麗なせいで周りから疎まれた？」

っあ、顔赤くした。けどなんか怒ってる・・・？

そして何か言おうと口を開く前に横槍が入った。

「天才さー。あんた初対面の女の子をなにナンパしようとしてるのよ」

セリアがいつのまにか近くに来ており呆れた顔をしていた。調子は一応いつも通りに戻っていて更に男を倒す際についた返り血も小川で洗い流したらしく、服や髪が多少濡れているもののこざっぱりした格好にはなっていた。

「姉さん・・・そんなことよりもこの子をどうするかでしょ？」

「え？ さっきいった通りうちに連れていくわよ」

「え？」

俺とセリアの会話に何か聞き捨てならないものでも感じたのだろうか。獣人の少女はすぐさま会話に割り込んできた。

「『え？』って当然よ。だって身元も分からないし、あなた一人を置いていっても絶対野垂れ死ぬでしょ？ 見たところあなた、私達と歳はそう変わらないよね」

「えう・・・」

「姉さん。怯えてるからそう捲し立てないで」

この子はセリアのことが苦手なのか、それともまだ話してないからなのか分からないが、セリアが一気に話していると若干だが体が震えてきていた。

「分かったわ。とりあえずここで話していても仕様が無いから行きましよ。」

「うん」

さつさと家に向かうセリアをすぐに追いかけようとしたが、唐突に何か思い出したようにこちらに向き直った。

「っあ！！ 勿論体の血は洗い流しておきなさいよ」

「・・・つまりだ。お前達は無謀にも人攫いをした男からその子を奪い返したと。そういうことなのか？」

父のロイは普段から使っている食卓の椅子に腰掛けて言った。眉間には深いしわが刻み込まれている。

「はい・・・。その通りですお父様」

それをロイの目の前で床に正座させられているセリアが辛そうに答えた。まあ、俺もその状態なのだが。

何故こうなったか？ これは言うまでもない。家に帰るや否やセリアの擦り傷を見て両親共々大慌て。そしてその真相を突き詰められていく内に段々とロイの眉間にしわが。母のファイからは黒い笑みがこぼれるようになっていった。

それで現在に至り、かれこれ2時間は正座させられている。

ちなみにファイは獣人の少女の姿を見てすぐさま体を洗いに行つて、次は着せ替えタイムに。いやあ、女の子の着替えって長いね。もう一時間経つてるよ。

「テオ」

「あ、はい」

足の痺れを紛らわす為にひたすら考え事をしていたが、次の質問は俺の方に回ってきたようで、見事に現実を引き戻された。

「お前は何か他に言い残すことはないか？」

言い残す事で・・・。遺言ですか。

言い残すことではなく気になることはあるから聞いてみるか。

「さっきの子の話を聞いてから分らなかったんだけど、なんで黒

髪は不吉だと思われてるの？」

するとロイは先程の空気とはまた違った厳しさを醸し出し始めた。やはりこの類の話は世間的にあまり話されちゃいけないことなのかなあ。

「お前にはまだ理解し難い話だとは思うが話してみよう。テオ。お前は村人皆の髪色が黒い人はいたか？」

「・・・いなかったよ」

「そう。黒髪の人は普通はこの世界にいない。だがな、偶にあの子のように何の予兆もなく黒髪の人物が生まれてくるんだ。そしてそれを不吉だとどこかの国の王が言ってその黒髪を見つけ次第死刑にした。ただそれだけの理由で黒髪の人物は不吉だと民衆に広まり、今に至るまでずっと不吉だという理由で差別し迫害されてきた。というわけだ」

「なによそれ！ そんなのただの理不尽じゃない！！」
隣で一緒に話を聞いていたセリアは憤慨していた。

成る程。確かに黒髪の人は見かけないし人間っていうのは分からないものには徹底的に弾圧する傾向がある。例えば魔女狩りみたいに・・・だけど、その理由にしちゃやることが激しすぎないか？

「父さん・・・。黒髪の人の不吉だと思われる理由ってそれ以外にも、もしかしてあるんじゃないの？」

途端にロイは目を大きく見開いた。

「お前・・・。。何故そう思った」

「だってそれって黒髪の人不被害されるにしては少し理由が抽象的だよな。しかもここまで抽象的だと誰かこれを疑問に思っただけで反乱を起こしたりするのかなあ。と思っただけ」

「お前はその歳にしては賢すぎないか？」

ているのは気のせいだろうか？

「この子親から売られたみたいだから私達が引き受けることにしたわ」

「『そんな簡単に決めちゃっていいの！！？』」

俺と話を盗み聞きしていたのかカーンが急に入ってきて叫んだ。それをファイは笑顔で一蹴し、続けて言った。

「いいのよ。この子可愛いから。どうせなら私とロイが教育してもいいわよ？」

・・・嗚呼、もう駄目だ。今までの経験で分かる。この笑顔になったら母さんはテコでも意見を変えないんだよな。というかあの獣人の少女のあの垂れ下がり具合はこのことによるのだったのかな・・・？

「だからね。あの子達に自己紹介してあげて」

すると、獣人の少女はおずおずと話し出した。

「・・・キアーラです。・・・よろしく願います」

正直言つてさっきの黒髪の話をしたから家族の皆は少しでも嫌な顔をするんじゃないだろうかと心配に思ったのだが、それは杞憂に終わったようで、家族皆が笑顔でキアーラを歓迎していた。

家族のひみつー

「うん、キアーラちゃんね。それじゃ次は私達からも自己紹介させてもらうわ。私の名前はファイ・ウィステリア。この家の主婦をしているわ。あなたはもうこの一家の一員なんだから遠慮せずに悩み事を持つてきなさいよ？」

ファイはキアーラの名前を確認するように反復した後に自らの自己紹介を始めた。そして次を目で俺たちに促すと、それにいち早く応じたカーンが話し始めた。

「俺はカーン。この一家の長男だ。よろしく」

いち早く反応した割には緊張した面持ちで手短に自己紹介を済ませた。あんたは人見知りか。

そして「次は俺だな」と呟きながらロイが立った。

「私はロイ。この一家の大黒柱だ。妻も言ったように君はもう私達の家族なのだから遠慮せずに甘えてくれ。困った時には手を貸そう」
「さつき一緒に帰ってきてたから分かるとは思っけど私はセリア。あなたのお姉さんになるし、女同士気兼ねなく相談をしてね。お母様に言えないことでも相談に乗るわよ」

「あ・・・はい。お願いします」

セリアが満面の笑みを浮かべながら元気よく右手の親指をぐっ！と突き立てながら言うのと、その元氣さに少し動揺したキアーラが戸惑いながら返事をしていた。

残るは俺だけか。自己紹介ってなんか苦手なんだよな・・・。

俺は何を言うか全く決まらないまま口を開いた。

「俺の名前はテオ。一家の末っ子だよ。そして同年代の友達はいな

いからよかつたら友達になつてくれたら嬉しいよ」

「あれ？ あんた同年代以外にも友達つていた？」

「そんなこと………あ、いないな」

セリアのツツコミに俺がしばらく考えて肯定すると、それをロイは呆れたように見ながら立ち上がって言った。

「まあそんなことはさておき、キアーラ。君もお腹が減つたろう？
もうそろそろ夕食にしようじゃないか」

途端にきゅるると小さくキアーラのお腹から音が鳴り、キアーラは顔を真っ赤にして俯いていた。

「ふふふ。体は正直なのね。それじゃ、すぐにご飯を作るわね」

その台所へと向かうファイの後姿はどこか嬉しそうな雰囲気を出していた。

「あなた達に魔法を教えるわよ」

「……え？」

次の日。朝食を済ました後に、俺、セリア、キアラがファイに呼び止められたと思っただけの言葉がいきなりこれである。あまりの突然の出来事に3人とも目を丸くしていた。

「ファイ。少し話が急すぎるだろう」

この微妙な沈黙に助け舟を出したロイはどうやらファイの意図を知っているらしく、次の話を続けて言おうとした。

「あのな。お前達は昨日のこともあるし、キアラちゃん。君も自分の身を守る程度には力をもっていた方がいいだろう」

「えーと。なんとなくは理解したんだけど……。母さんは魔法が使えたの？」

「そうなのよ。今まで隠していたことなんだけど、私は昔ある王国の宮廷魔術師をしていたの」

「……………は？」

今ファイから聞いた話をまとめるとだ。

ファイは昔ある王国で宮廷魔術師として働いていたが当時、同じ国の近衛騎士（階級は教えてくれなかった）をしていたロイを見て一目惚れ。そして二人してその職業を辞めて、どこか静かに暮らすことの出来る所はないかと旅をしていたところこの村を見つけて以来、ここで過ごしているのだそうだ。

ちなみにその時にファイは何か役に立つかもしれないと思い、実家にある本を片っ端から詰め込んで持っていったんだそうだ。

だからこの家には大量の本が置かれてあったのか……。

「こんな感じでこんな感じで私が魔法を使えるのは分かったでしょう？」

「はい……。ですが、何で魔法なんですか？ 体術を学んだ方が便利だと思いますが」

キアーラが真面目な口調でこの家族の中で最も信頼しているであろうファイに質問した。

「キアーラちゃんまだ話し方が固いね。後、私は魔法だけを教えるとは言つてないわ」

「え？」

「私があなた達の適正に合わせて回復魔法から四属の魔法、精霊魔法を教えて、ロイが素手と武器での戦い方を教えるのよ」「母さん……。それをして僕らを何処に旅させる気なの？」

つい愚痴を言ってしまう程、自己防衛するための力を身につけるにはやはりすぎな気もする。

「そうねえ……。近所の学園の主席でも狙わせようかしら？」

ファイが笑いながら冗談を言った。

ちなみに俺は本を読んで知っているのだが、ファイのいう学園で近所といえど、こちらで武術、学問ともに最難関と言われる学園のことを指しているのだろう。セリアとキアーラは何処の学園か分からないから俺はそのまま黙秘することにした。だって面倒くさい。

「……………ま、まずは書斎に行くわよ！」

ファイが説明するうちになにやら変な空気になっていることにより、やく気づいたらしく少し焦ったように先導し始めた。意外とノリだけで動いてるなあ。この人。

そして書斎に移動し、ファイは”魔術書　〈中級編〉”という題名の本を本棚から引つ張り出してから机に広げた。どうやら内容を見る限り、まず回復魔法の初歩を教えるようだ。

セリアとキアーラは文字が読めないらしく二人とも眉間に微かにしわが出来ていた。

「っあ、セリアとキアーラちゃんは字が読めなかったのね。でも大丈夫よ。そんなに顔をしかめなくても私が実践するからそれと同じようにすれば出来るわ」

「・・・テオは文字が読めるんですか？」

文字が読めない人の中に俺の名前が挙がらなかったことを不思議に思ったキアーラが尋ねてきた。

「うん。俺は一応4歳頃に文字の読み書きは習ったから大体の本は読めるよ」

「4歳・・・」

「ああ、キアーラ。あなたが出来ないんじゃないわ。4歳から既にそういつてことに興味をもつテオが変わり者なのよ」

4歳という言葉に啞然としていたキアーラにあっけらかんとした様子でセリアがフォローした。しかし、変わり者とは失礼じゃないかな？

「なら二人は今日教えてもらった後にテオから文字の読み書きを教えてもらったかどうかしら？　とりあえず、私の暇も無限じゃないから手っ取り早く教えるわよ。まず、頭の中でこの傷を癒せる光を手具具現化させるイメージをしなさい。魔法はほとんどがイメージ

で出来るものが決まるからイメージは大切よ」
そう言いいいながら手のひらをナイフで軽く傷つけた。

そして俺は火の魔法を作り出した時と同じように魔力を体の中に取り込み、今回は頭が痛くなる前に取り込むのを中断し、次の段階であるイメージを構成した。すると、手の平から少し黒が混じった緑色の光の玉が出来ていた。

「母さん、これ？」

「そうね。あなたは魔法の才能があるのかしら？ 一回で出来てこの大きさの玉はさすがに始めてみたわ・・・」

さすがのファイもこれには驚いているようだった。反応から察するに、この回復魔法は玉の大きさが大きければ大きいほど回復量が増加するというような仕組みなのだろうか？

「ファイさん・・・！ 私も出来たよ」

弾むような声がするので隣を振り向くと少し汗をかいてはいたが、キアラからの手から白い光を放つ先ほど俺が出したものよりも少し小さな玉が出来ていた。

そしてファイの方を見ると、絶句していた。

「キアラちゃん・・・！！ その色の魔法はもしかして・・・。」

あなたは光の属性を持っているみたいよ」

普段からは信じられないほど動揺しながらもキアラの頭を撫でながら褒めていた。そしてキアラは褒められた嬉しさでその様子にも気づいていないようだった。

対する俺はというと、目の前の出来事を理解するべく頭脳をフル回転していた。

光の属性？ 4属は火、水、風、土で光はなかったはずだ。ということはこの世界に4属以外にイレギュラーの属性にあたるものが光ということか？ 後でこっそり聞こう・・・。

そして更にキアーラの隣から少し言いづらそうにセリアが口を開いた。

「あのー。母さん？ 私のこれって回復魔法っていうの？」

そしてセリアの手の中を三人が除くと皆同じように何か反応に困った顔をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5673z/>

自由きままに異世界記・・・と熊

2012年1月12日22時48分発行